

奇計

桶狭間合戦の真実

太田
輝夫



奇計

桶狭間合戦の真実

太田 輝夫

きけい【奇計】普通では考えもつかないような巧みな計略。奇策。

(三省堂 大辞林)

桶狭間合戦の地形

桶狭間合戦

永禄三年（一五六〇）五月十九日、尾張の東、名古屋市緑区から豊明市にかけて、日本の歴史を変える重要な戦いがあった。



北

東

南

2 は豊明市栄町南館^{やかた}で、当時は大脇村。昭和十二年に国から「桶狭間古戦場伝説地」として史跡に指定されている、本書では主戦場とし「豊明史跡」と表示しています。



1 は名古屋市緑区有松町桶狭間北二丁目で、当時は桶廻間村。
本書ではこの地で最初の戦があったとしており、「有松桶狭間」または「桶廻間村」と表示しています。

はじめに

桶狭間合戦は、二万五千の大軍で尾張へ攻めてきた駿河すろがの今川義元を、織田信長が二千の兵で破ったと言われています。小軍が大軍に勝った戦としては日本の歴史上最大の出来事であり、他にも類例がありません。この奇跡的大勝利により織田信長が天下取りに名乗りを上げることになった重要な合戦で、信長にはどのような作戦があったのでしょうか。

この歴史的合戦には諸説があるが、今まで語られてきたことが正しかったのでしょうか、文献史料や痕跡を調べているうちに、信長には周到に準備した驚くべき奇計まげい（考えもつかない巧妙な計略）があったことがわかってきました。その真実を明らかにしたいと思います。

本書では、当時三四歳で桶狭間合戦に参戦したとみられる信長の家臣、太田牛一が著作した『信長公記』しんちやうこうきを基本史料としています。しかしすべてについて明確に書かれていないわけではないので、あいまいな表現のところや、書かれなかった部分については、証拠となる他の史料を探し出して解明しています。『信長公記』の誤説をさけるためです。

桶狭間合戦については、明治三一年に旧陸軍参謀本部さんぼうが唱えた「迂回奇襲説」うかいが通説として信じられてきました。田楽狭間（豊明史跡）で休憩して油断していた今川本陣を織田軍が突然襲った典型的な奇襲戦とされてきました。

しかし現在では参謀本部の「迂回奇襲説」は間違いとされ、最も有力な説は「正面攻撃説」となっています。その説では今川本陣は豊明史跡ではなく、桶狭間山の頂上にあり、信長には作戦がなく、正面から今川軍を攻撃して山上の義元を討ちとつたとしています。

また、「奇襲」は小瀬甫庵おせほあんが『信長記』しんちやうきで創作した小説で、真実ではないと指摘していますが、戦の直後に書かれた次の文献史料には、信長の作戦があったと記されているので、「正面攻撃説」には疑問があると考えています。

『敵助大僧正記』

「駿河今川。(尾張へ)尾州江入国。織田彈正忠(信長)回武略打取之事有之」

京都醍醐寺理性院敵助(当時六七歳)の自筆の書で、戦の直後に京まで伝わってきた話なので、五一年後に世に出た甫庵『信長記』の影響はありません。信長が武略をめぐらして義元を討ち取ったと伝えており、通常の戦闘ではなかったことを証言しています。したがって、まともに正面から攻撃して今川軍を破ったのではないし、偶然の暴風雨に助けられて勝ったのではないことがわかります。信長には作戦はあったと言える。

『春日山日記』

「永祿三年五月に尾州(尾張)の忍(しの)の者来て云。今月義元駿城(駿河城)を発し、遠州(遠江)、参州(三河)を経て桶狭間にて信長と合戦す。義元の人數三万に及ぶ、信長は二千に不足と云へども信長奇計(きけい)を以て義元が不意を打て遂に義元の首を得る。従是信長は尾州を全平治すと云り」

「今月」合戦があったとしているから、戦のすぐ後に信長が忍びの者を派遣して、長尾輝虎(上杉謙信)に知らせるよう越後(新潟)の春日山城へ走らせたと思われる。『春日山日記』とする日記からの転載なので、間違いなく直後の記事で、奇計を以て不意をうち義元の首を得るとしており、不意打ちする奇計があったことは確実です。したがって「奇計」は信長の言葉と思われまます。

これらは一次史料であり、巧妙な計略による奇襲があったことは事実と考えられます。

小瀬甫庵は、当時このように語られていた話を聞いていたのであり、奇襲は甫庵の創作ではないと言える。『信長記』も史料として使える部分はあると考えます。

小瀬甫庵『信長記』については(39頁)をご参照ください。

目次

はじめに	2
一 桶狭間合戦の背景	6
二 桶狭間合戦までの今川義元	8
三 桶狭間合戦までの織田信長	9
四 従来のおもな説と本書の説	10
1 参謀本部の「迂回奇襲説」	
2 「正面攻撃説」	
3 有松桶狭間の「田楽坪戦場説」	
4 「時間差二段攻撃説」(本書の説)	
五 今川本陣の場所	13
六 進軍経路	15
1 今川軍の進軍経路	
2 織田軍の進軍経路	
七 先鋒で戦った一手とは	18
八 真実の桶狭間合戦	20
九 証拠史料	23
1 (注1) 松井宗信が今川軍の先頭にいた証拠	
2 (注2) 佐々隼人正がおとり役を引き受けていた証拠	
3 (注3) 山の上から攻撃があった証拠	
4 (注4) 本陣の実態を示す史料	
十 おとりの策を信長が考えていた証拠	26
十一 義元はなぜ油断して酒宴を開いたのか	28

■ 疑問に答える (Q & A) 30

- Q 1 今川義元は上洛しようとしていたのですか？
- Q 2 今川軍の出陣数は何人ですか？
- Q 3 今川義元はどのような作戦だったのですか？
- Q 4 今川軍本陣は桶狭間山の頂上とする説があるが？
- Q 5 桶狭間山はどこですか？
- Q 6 名古屋市緑区有松町桶狭間の七ツ塚は何か？
- Q 7 なぜ桶狭間合戦というのですか？
- Q 8 豊明史跡に塚があったというが？
- Q 9 豊明史跡を戦場とする証拠はありますか？
- Q 10 出土した武具などは残っているのですか？
- Q 11 義元はどこで討たれたのですか？
- Q 12 今川軍の主な戦死者には誰がいますか？
- Q 13 戦人塚に戦死者が埋められたというのが本当ですか？
- Q 14 鎧掛けの松は何だったのですか？
- Q 15 小瀬南庵『信長記』はどのような史料ですか？

■ 参考写真 41

1 今川の城 41

① 鳴海城 ② 大高城 ③ 沓掛城一 ④ 沓掛城二

2 織田の砦 42

① 善照寺砦 ② 中島砦 ③ 鷺津砦 ④ 丸根砦

3 豊明史跡 43

① 義元塚 ② 義元仏式の墓 ③ 七石表一号碑

④ 高德院

おわりに 45

参考文献 47

『明治二四年測地地図』 48

(表紙絵) 大将ヶ根にむかう信長

小田切春江画 (部分) 高德院蔵

一 桶狭間合戦の背景

応仁の乱（一四六七）の権力闘争で足利幕府が力を失った室町時代の後期、各地の大名が力をつけて領地を取り合う争いが繰り返される戦国時代となった。権力を手中にしようとして領地を拡大し、天下取りをねらう大名が台頭してきた。

その中でも駿河（静岡県東部）の今川義元は足利將軍家の一族として名門であり、上洛して將軍家を補佐し、あわよくば將軍家にとって代わろうとする野望を抱いていた。今川義元の父氏親は西の遠江（静岡県西部）を服従させ、義元も三河（愛知県東部）に攻め込み、西へ西へと領土を拡大してきた。義元は「東海一の弓取り」と言われていて、当時最も將軍に近い存在として高く評価されていた。

今川が、織田信秀（信長の父）の城になっていた三河の安祥城（安城市）を落としたのは桶狭間合戦の十一年前で、翌年には三河の多くの地を今川の支配下とした。

義元は北の甲斐武田信玄、東の相模北条氏康と、婚姻関係による甲相駿三国同盟を結び、尾張（愛知県西部）への

侵攻を開始する。

尾張鳴海城（名古屋市緑区鳴海町）の山口左馬助は信秀の死をきっかけとして今川に寝返り、左馬助の働きで大高城（名古屋市緑区大高町）も沓掛城（豊明市沓掛町）も今川に寝返った。

尾張国内では織田家の中で争いが続き、信長が尾張を統一できたのは桶狭間合戦の前年のことであった。今川に寝返った鳴海城を丹下砦、善照寺砦、中島砦で囲み、大高城には鷲津砦、丸根砦を築き、兵糧攻めを行っていた。

今川義元は尾張を制圧するため、永禄三年（一五六〇）五月大軍を率いて侵攻してきた。一般的には二万五千とされているが、一万から六万まで史料は分かれていて正確な数はわかっていない。ただ今川義元本隊の兵は五千であった。

一方の織田信長は総勢集めても五千であったという。今川本陣を攻めた兵を三千とする史料が多いが『信長公記』では二千の兵で中島砦から東へ向かったとある。

五月十九日朝、今川義元本隊は五千の兵とともに沓掛城を出発し、大高城へ向かう途中、昼に本陣で休憩中の午



図2 永禄3年(1560)5月 桶狭間合戦直前の勢力図

織田 今川 0 10 20km

の土地は尾張領だが、今川の支配下になっていたとみられる。ただし、戦の当時には砦を築くなど部分的に取り返していた。



図3 尾張・三河地方(破線は推定海岸線)

0 10km

後二時、二千の織田軍に突然襲われる。義元は三百の兵に囲まれて東へ退くが、ついに首を取られる。今川軍は二千五百人の死者を出し大敗北となった。

信長は、なぜわずかな兵で大軍の敵に向かっていったのか、しかも一方的に勝利することができたのか、『信長公記』はその理由を明確にしていない。戦に参加していた者に作戦は示されていないと考えられる。

したがって、他の史料からその理由を探ることにする。



二 桶狭間合戦までの今川義元

1519年	(永正16)	今川氏親の5男として義元誕生、幼名方菊丸。母は正妻の寿桂尼（公家の出）、4歳で寺に預けられ12歳で出家（僧名梅岳承芳）、京都建仁寺で修業。
1526年	(大永6)	義元8歳の時、父氏親死去。兄の氏輝が家督を継ぐ。
1536年	(天文5)	長兄氏輝、次兄彦五郎の相次ぐ死によって、義元18歳で家督を継ぐ。3男の兄玄広恵探が異を唱えて挙兵するが、負けて自害（花蔵の乱）。
1547年	(天文16)	三河松平広忠の嫡子竹千代（6歳の家康）を人質にして駿河へ送らせる途中、織田側に奪われる。
1549年	(天文18)	織田の城となっていた三河の安祥城（安城市）を攻め、城主信広（信長の兄）を生け捕る。松平竹千代と織田信広との人質交換を笠寺（名古屋市南区）で行い、竹千代は今川の人質となる。総大将は戦の天才と言われた軍師雪斎（太原崇孚）で、連戦連勝であった。
1550年	(天文19)	今川に寝返った鳴海城の山口左馬助が、大高城と沓掛城を今川へ寝返りさせるよう働く。後に左馬助は信長と何度も戦っている。
1552年	(天文21)	松平勢と共に沓掛で織田軍と戦う。 11月 義元の娘と、武田信玄の嫡子義信との婚姻が成立する。
1554年	(天文23)	息子氏真に北条氏康の娘を娶る。北条と武田との婚姻も成立し、三国同盟が完成する。それにより全力で西へ攻め込むことを可能にする。 尾張村木（東浦町）に砦を築くが、信長と水野信元連合軍に攻められて陥落。
1555年	(弘治1)	前年に吉良実相寺住職となっていた雪斎が没60歳。（義元37歳）
1558年	(永禄1)	山口左馬助が織田と通じているとする偽情報に激怒し左馬助を殺す。鳴海城は、今川の武将岡部元信に守らせる。 息子氏真(21歳)に家督を半分譲り、翌年全部を譲る。尾張侵攻の体制を整える。
1559年	(永禄2)	大高城、鳴海城が兵糧攻めにあい、沓掛城から兵糧を入れようとするが何度も失敗。松平元康（家康）が成功させる。
1560年	(永禄3)	5月1日 家臣を招集し出陣の号令を発する。（義元42歳） 5月10日 先発隊が出発、12日義元軍が出発する。17日に知立に泊る。 5月18日 沓掛城に入り、午後軍議を開く。夜松平元康が大高城に兵糧を入れる。 5月19日 早朝、丸根砦と鷲津砦を攻めさせる。砦は8時には炎上、相次いで陥落。 義元本隊五千は大高城を目指して沓掛城を出発する。 そしてその時を迎えることとなる。



三 桶狭間合戦までの織田信長

1534年	(天文3)	織田信秀の次男として信長誕生、幼名は吉法師。信秀は尾張上四郡の守護代大和守家の軍奉行で、勝幡城主（稲沢市）であった。その頃那古野城（名古屋城）は今川義元の弟氏豊の居城であったが、信秀が策略で奪い氏豊を京へ追放する。信秀是那古野城を吉法師に与え、林通勝、平手政秀などを家老とする。
1547年	(天文16)	信長初陣で平手政秀と共に三河大浜を攻め、所々に放火する。(14歳)
1548年	(天文17)	信秀、美濃（岐阜県南部）の斎藤道三と戦い敗北するが、平手政秀の仲介で和議を結び、信長は道三の娘（濃姫）と婚約する。(15歳)
1549年	(天文18)	父信秀急な病で死去、2年間喪を秘す。16歳で家督を継ぐ。(異説あり) 三河の安祥城を今川に取られ、人質交換で8歳の家康が今川へ移る。
1551年	(天文20)	信秀の葬儀で抹香を仏前に投げつける事件を演じ、うつけと呼ばれる。(18歳)
1552年	(天文21)	杓掛で今川軍と戦う。8月 萱津(あま市)で大和守家守護代織田彦五郎と戦う。(19歳)
1553年	(天文22)	1月 平手政秀、信長の素行を諫めて切腹。4月 斎藤道三と会見。(20歳)
1554年	(天文23)	1月 今川の村木砦(東浦町)を攻め落とし、水野信元との同盟を守る。
1555年	(弘治1)	守護の斯波義統を殺害した守護代の織田彦五郎と戦う。4月 彦五郎を討ちとり、斯波家の若殿(義銀)と共に清洲城へ移る。(22歳)
1556年	(弘治2)	8月 弟信行と稲生(名古屋市西区)で戦う。信行に味方した家老の林通勝・柴田勝家軍を破るが、謝ったので許す。(23歳)
1557年	(弘治3)	11月 柴田勝家の通報で、再び背いた弟信行を策略により討つ。(24歳)
1558年	(永禄1)	5月と7月 浮野(一宮市)で上四郡の守護代岩倉織田家と戦い、撃破するが岩倉城(岩倉市)は落とせず。(25歳)
1559年	(永禄2)	岩倉城を取り囲んでいた2月2日に突然上洛して足利将軍に謁見、7日に帰途につく。3月3日岩倉城の織田信賢は和議により降服、信長は尾張を統一する。今川の城となっていた大高城・鳴海城を囲む砦を築き、兵糧攻めを行う。
1560年	(永禄3)	3月今川の笠寺城に夜討ちを仕掛ける。その後笠寺一帯は織田側に戻る。 5月 5日 三河の吉良(今川の出身地)に攻め込み、実相寺を焼く。(27歳) 5月 18日 今川軍が迫る情報により清洲城で軍議を開くが、鷲津砦・丸根砦からの応援要請にも動かず、信長は雑談ばかりで何も指示しなかった。 5月 19日 早朝、報せを受けて起き、幸若舞の「敦盛」を舞う。出陣合図の法螺貝を吹かせ、主従6騎で清洲城を出発。熱田神宮で参拝、午前8時、宮の前で鷲津・丸根の砦から立ち上る煙を確認、上道を通して急ぐ。善照寺砦に到着と同時に、待機していた佐々隊三百をすぐ出発させる。家老から止められるが振り切って中島砦に至り兵を加える。またも家老から止められるが説得し、二千の兵で東へ進む。まれにみる暑い日であったが、山際に到着した時、急に黒雲がわき上がり、雹を降らす豪雨となった。

ここまでは『信長公記』や、他の史料にも記載があるが、その後の戦いについては諸説があるので、確認する。

四 従来の主な説と本書の説



図4 桶狭間合戦場地図 (従来の主となる3説と太田説)
 ①参謀本部説と太田説の本陣 ②正面攻撃説の本陣 ③田楽坪戦場説の本陣

1 参謀本部の「迂回奇襲説」

旧陸軍参謀本部が明治三十一年に発表して長く通説となっていた『日本戦史桶狭間役』。

概略は図の通り、大きく北へ迂回して奇襲したとしている。

「今川義元は二万五千の兵を引き連れて出陣。沓掛城で軍

議を開く。翌十九日朝、義元本隊の五千は沓掛城を出発して大高城へ向かうが、大高での鷺津砦・丸根砦攻撃の勝利を聞き、田楽狭間(豊明史跡)で休息した。佐々・千秋隊との鳴海方面での勝利の報告を聞いて喜んでいた時、近辺の神官や僧侶から酒肴の進上があり、盃を上げ警備を怠った。

信長軍は熱田神宮に集結して戦勝祈願し、善照寺砦に至った。信長が来るのを見て、佐々・千秋隊三百は鷺津砦を落とす敵に向って行くが討たれる。

たまたま梁田政綱の諜者が沓掛方面より帰り、義元は大高方面へ移ろうとしていると告げ、さらに別の諜者が田楽狭間を本陣としたことを報告した。そこで梁田は信長に不意に本軍を襲うことを進言、信長はそれをよしとして若干の兵を残し、二千の兵を率いて善照寺砦より大きく北へ迂回してから南下して太子ヶ根に至り、山を下って敵を突いた。休憩中の義元軍は風雨のために敵が近いことを知らず、大いに驚き討たれてしまった」

筆者注1

「善照寺砦から北へ迂回」とした織田軍進路は『信長公記』に反しており、疑問がある。梁田が信長に進言したのは善照寺砦ではなく、太子ヶ根でのこと。

2 「正面攻撃説」

昭和五七年に藤本正行氏により初めて唱えられた説で、現在最も有力な説として『日本歴史大辞典』など多くの本に紹介されている。

正面攻撃説は参謀本部の説を、信憑性しんぴやうせいに疑問のある小瀬甫庵ほあんの『信長記』を基にしており、善照寺砦から北へ大きく迂回したとする良質の史料はなく、奇襲とする史料は甫庵が創作した小説を史実と誤解し、影響を受けたものにしてきないとして否定し、次のように説明している。

中島砦を出た信長軍は（東海道筋を）まっすぐ東に進み、中島砦を囲んでいた今川軍の前軍を正面から打ち破り、その勢いで後方の桶狭間山に本陣を構える今川軍に攻め上がり、今川軍の混乱に乗じて義元の首もたまたま運良く取る事ができた。攻め上がったとする桶狭間山は、中島砦から南東二キロの「高根山たかね」としている。また、佐々隼人正らは抜け駆けして信長が見ている前で討たれたとする。

筆者注2

この説は「はじめに」で紹介した日記などの一次史料に反しており疑問。少数で山上の大軍を破ることは極めて困難。また、佐々らが抜け駆けしたとするのは疑問。

3 有松桶狭間の「田楽坪戦場説」

この辺りで最も高い山で、豊明史跡の南南西六〇〇m、緑区桶狭間の東六〇〇mにある六四・七mの山を桶狭間山であったとして、その頂上に義元本陣があり、その山に織田軍が攻め上がり、西の田楽坪で義元は討たれたとする説がある「正面奇襲説」。

一方、有松桶狭間の地元での田楽坪戦場説はやや異なり、六四・七mの山の西斜面に義元本陣があったとしていて、有松の桶狭間古戦場公園の北四〇〇mにある「釜ヶ谷」に待機していた信長が桶狭間山に攻め上がり、西の田楽坪に今川軍を追い落とし、田楽坪の深田で義元を討ち取ったとする。「桶狭間合戦」だから「桶廻間村」が戦場で、豊明史跡は本陣ではないと主張している。

筆者注3

『信長公記』に、今川本陣を東へ攻めたとあるが、この説は西へ攻めたことになり、疑問がある。

4 「時間差二段攻撃説」(本書の説)

平成二四年に筆者(太田)が初めて唱えた説で『桶狭間合戦奇襲の真実』(新人物往来社)で戦の実態を明らかにした。信長進路は参謀本部説とも正面攻撃説とも異なり、中間の山道を最短距離で東へ向かい、太子ヶ根(山)の麓に至り、北谷を本陣として待機した。

信長は兵を二手に分けていて、戦は一度ではなく二度行われた。

善照寺砦を出た佐々・千秋隊三百は太子ヶ根を通過して桶廻間村に向かい、谷(釜ヶ谷)で待機する。最初の戦いは昼頃で、佐々らは進軍してきた今川軍の先頭を攻撃する。先頭から一キロ後方の田楽狭間(豊明史跡)で敵襲来の報せを聞いた義元は塗輿から降り、即座に主力部隊を先頭へ送る。降りた場所を臨時の本陣とするが、本陣は手薄になる。やがて届いた勝利の報告に喜び、昼食を兼ねた祝宴を開き、祝い酒を出した。

太子ヶ根の北谷で待機していた信長軍は、雨がやむのを確認したあとの午後二時、今川本陣の西の山を回り、南からと山の上から同時に本陣へ突入した。油



図5 時間差二段攻撃 ①佐々隊 (昼頃) ②信長本隊 (午後2時) 上が北

断していた今川軍は不意を突かれて総崩れとなる。義元は三百の親衛隊に囲まれて東へ逃げ、五度ほど戦うが、兵は深田に足を取られて討たれて五十に減り、義元はついに首を取られた。

これらはすべて信長の奇計とも言える作戦であり、それに義元がまんまとはめられた。その証拠、および詳しい内容は以後に示す。

五 今川本陣の場所

江戸時代の史料には今川本陣を「桶狭間・田楽窪・田楽久保・デンガクガツボ・田楽坪・田楽狭間・屋形狭間」と多くの呼び方で表記されているが、実はこれら地名はすべて豊明史跡のことを示しているのです。

豊明史跡は現在「南館」の地名で、古くから「やかた」と呼ばれており「屋形狭間」は豊明である。義元が「駿河の御屋形様」と呼ばれていたことから「屋形狭間」と言われるようになったと『今川義元桶迫間合戦覚』にある。

『桶狭間古戦場之図』（14頁図6）は、豊明史跡を図で示し「宝永五年（二七〇八）五月十八日屋形狭間においてこれを描く」としており、屋形狭間を桶狭間古戦場としている。図中の説明には「古名田楽狭間、今屋形狭間という」「屋形狭間、古くは田楽窪」とある。「田楽窪」は、豊明史跡から北東二キロ、当時の主街道であった鎌倉街道の藤田学園保健衛生大学（現在藤田医科大学）のある場所でもある。古くから歌に詠まれていて全国的に名を知られた場所。「田楽狭間」と聞いて、有名な鎌倉街道の「田楽窪」

と勘違いされたと思う。

鎌倉街道の「田楽窪」の方を「でんがくがつぼ・デンガクガツボ」と記している史料が複数ある。筆書きなので「クボ」を「ツボ」と読み間違えた史料が古くからあって、「坪」と当て字され、「田楽窪」デンガクガツボ、デンガクガツボ「田楽坪」と変化したと考えられる。

承応二年（一六五二）の山鹿素行『海道日記』に「ヲケハザマ、デンガクガツボここに今川義元の討死の所とて塚あり、左の山の間のサワにあり」としており、東海道を西に進む際、左の山の間の沢に塚があったとある。山鹿素行は四年後に出版した『東海道日記』では「デンガクガツボを「田楽窪」に書き換えている。

宝永六年（一七〇九）の大曾根佐兵衛『東海道駅路の鈴』は「でんがくがつぼ所の者は御屋形はざまと云」とある。これも東海道を旅した時に地元で聞いた記録。屋形狭間であるから「田楽坪」も豊明史跡のこととわかる。現在有松の桶狭間古戦場公園を「田楽坪」としているが、「広坪」が元の地名。

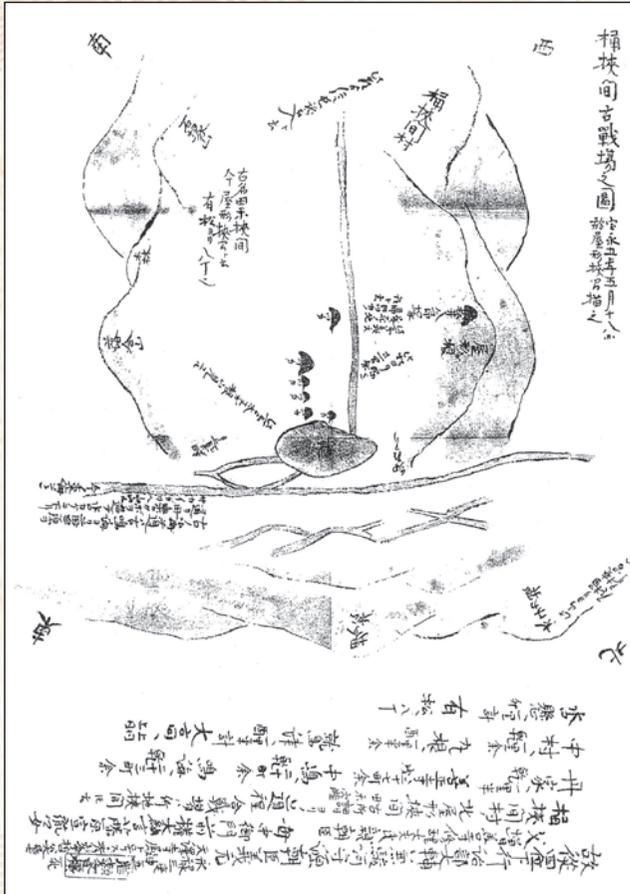


図6 「桶狭間古戦場の図」
宝永5年（1708）
西尾市岩瀬文庫

故従四位下行治部大輔兼駿河守源朝臣義元
 永禄三年庚申五月十九日横死 天澤寺殿卜号ス秀峯哲公大居士
 父増善寺修理大夫氏親朝臣 母中御門前権大納言藤原宣胤卿女
 桶狭間村ノ北屋形狭間 古所謂田楽窪 ヨリノ道程
 合戦場ハ竹地狭間トモ云 丹家へ一里半乾 善正寺へ二十七町余成
 中嶋へ二十町余乾 鳴海へ二十三町余乾 中村へ一里余乾
 丸根へ一里半余西 鷲津へ一里半計西 大高へ一里半計西
 沓懸へ一里計卯 有松へ八丁

図6は図7の3年後に描かれていて現地で確認して描いたようだ。内容はほぼ同じで情報を追加している。

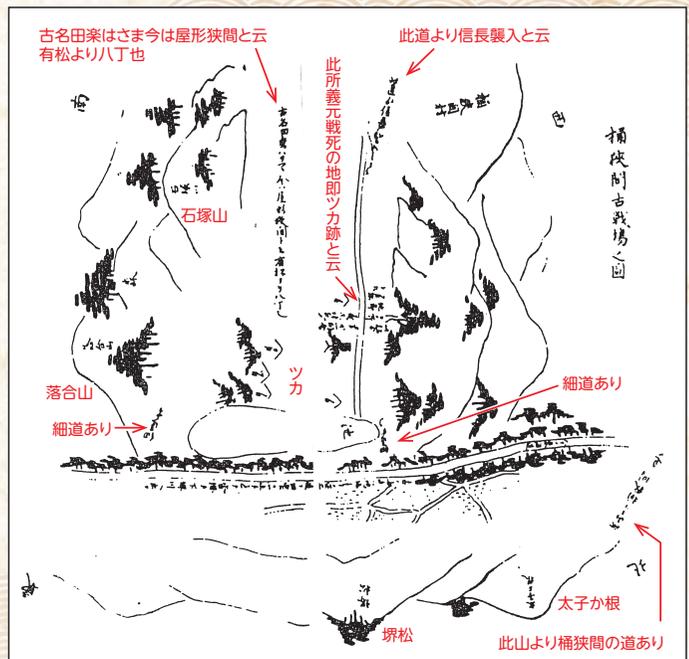


図7 「桶狭間古戦場の図」
宝永2年（1705）
国立公文書館（塩尻）

六 進軍経路

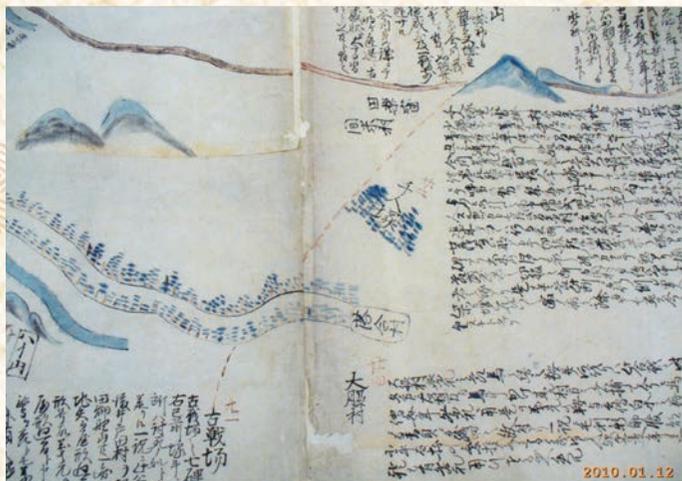


図8 「桶狭間合戦名残」(豊明市蔵)に描かれた今川進路 上が北

1 今川軍の進軍経路

今川義元は沓掛城を出て大高城へ向かっている。大高城には千艘せんそうの船が用意されていたと『信長公記』にある。船を利用する作戦があったと思われる。大高城を囲む砦を陥落させたのも、大高城を安全にするためである。

今川軍の進軍経路については豊明市の旧間米村にあった史料『桶狭間合戦名残』(図8)に図入りで示してある。それによれば、沓掛城を出てから鎌倉街道を二村山の峠まで行き、田楽窪でんがくくぼ(藤田医科大学の地)から南へ折れ、間米村を通過して豊明の古戦場へ行ったとある。

戦の後、落武者が敗走してきて間米村で行き倒れた者もいたと伝え、切腹した武将もいて、落武者の塚もあるし、碑もあると記してある。現在も志水又六の石碑が祀られている。村の寺、宝性院には今川義元菩提所ぼだいしよと記された厨子ずしがあり、昭和五十一年に廃寺となるが、厨子は沓掛の慈光寺に移されて現存する。したがって、この経路は事実と思われる。

2 織田軍の進軍経路

信長が中島砦まで来たことは『信長公記』にあるが、その先は明確な表現にはなっていない。

『桶狭間合戦申伝写』おけはざまあはせつりていには「閑道扇川を登りて会下山北谷辺りに御着陣」とあり、扇川の土手は道になっていたようだ。

『桶狭間図』おけはざま(蓬左文庫)ほうさ(図9)に織田軍の進路が図入りで示してある(会下山は太子ヶ根のこと)。



豊明史跡の北、鉄塔の辺りが大将ケ根、左に太子ケ根があったが現在は無い

から、北谷がその山際ではないかと思う。

(図9)では坊主山の北の道を通っている。坊主山は現在の平子が丘で、その道は現在もある(焼田橋南から東に向かう坂道)。明治二四年測地地図(48頁図18)にもその道の記載がある。

本文中に「中島の砦に入、直に東の山間へ押す、太子ケ根の麓より屋形狭間へ横入の由」とあり、屋形狭間(豊明史跡)へ横から入ったという。

太子ケ根からの進路は天野信景の随筆集『塩尻』に次のようにある。

中島砦から東へ進み、山の中を通って太子ケ根(大将ケ根)へ至り「信長本陣」にしたという。『桶狭間古

戦場図』(国会図書館蔵)には会下山と大将ケ根は同じ山とあるので、北谷が信長本陣とわかる。『信長公記』に「山際まで」とある

「太子が根より二手に分ち、一手は駿兵の先手にあたらせ、自も南へまはり来りて田楽が窪(豊明史跡)の本陣を攻め、急に撃たまひしが駿兵不意に襲れ(中略)駿兵狼狽して東に走る」

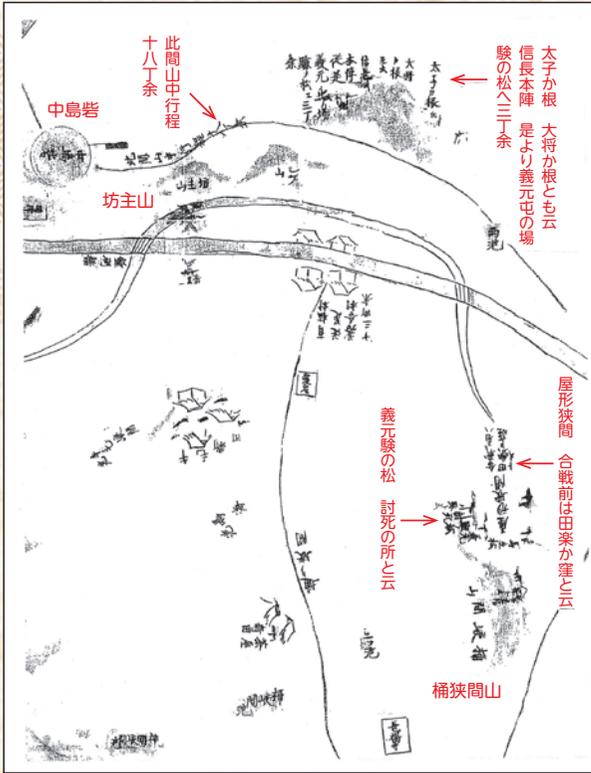
兵を二手に分けていて、先鋒の一手が太子ケ根から今川軍の先手(行軍の先頭)と戦っている。信長は山の後ろを回って南から攻めたという。

『桶狭間古戦場之図』(14頁図7)の南西に「此道より信長襲入と云」とあるので、信長は豊明史跡の南から攻めたことが確認できる。(14頁図6)も同じ。

松平君山の『張州府志』には次のようにある。

「信長山の後を循、其不意を疾撃、義元隊中に突入」
信長が山の後ろをめぐる、としているのは豊明史跡の西の山の後ろをめぐるりと回って南から突入していたのであって、『塩尻』と同じ。

小瀬甫庵『信長記』では、「敵勢の後の山に至て推まはすべし。去る程ならば、山際までは旗を巻き忍び寄り、義元が本陣へかかれと下知し給ひけり」として、これは『張州府志』や、『塩尻』と同じで、今川本陣の西の山を後ろか



ら回って南から攻めると命じていたこととわかる。
 甫庵のこの言葉は、突入前に太子ヶ根の北谷（信長本陣）で信長が「山の後ろを回れ」と命令したのであるが、参謀本部は「善照寺砦から北へ大きく迂回しろ」と信長が命令したと理解したので「迂回奇襲説」となったのであって、参謀本部が甫庵『信長記』を読み間違えていたこととわかる。したがって迂回の進路は甫庵の創作ではない。

図9 「桶狭間図」(蓬左文庫)に描かれた信長軍進路 上が北



図10 桶狭間合戦の地図 今川軍進路は「桶狭間合戦名残」豊明市所蔵による 織田軍進路は「桶狭間図」蓬左文庫及び「塩尻」桶狭間古戦場の図による
 ①緒戦(昼頃) ②主戦(午後2時)

七 先鋒で戦った一手とは

『松平記』には「善照寺の城より二手になり、一手は御先衆へ押来、一手は本陣のしかも油断したる所へ押来り」とあり、兵を二手に分けたとしている。

『信長公記』では、善照寺砦から、佐々隼人正と千秋四郎が三百で「義元へ向て足輕に」出たとあるので、先鋒の一手は彼らとわかる。佐々らが義元行軍の先頭（御先衆）に向かつて行ったということになる。『塩尻』の「一手は駿兵の先手にあたらせ」とも一致する。

初代尾張藩主徳川義直が、父家康の功業をまとめた『成功記』が蓬左文庫にあり、次のように記している（学者堀杏庵との共同執筆の可能性がある）。

「是に於て先軍を十町の外に出さしめ而、桶峽之山の北に陣す。信長の先鋒、佐々隼人正、千秋四郎、岩室長門守等義元の先陣に入て死す。是により義元益々謾侮の心有り也」

信長の先鋒、佐々らが義元の先陣に攻めかかったので、義元は先軍を十町の外に出し、それで桶狭間の山の北に

本陣を構えた。佐々らが先頭と戦って討ち死にするが、その勝利の報告から義元は益々慢心して織田軍をあなごった。

豊明史跡の十町（一・一キロ）先とは、桶廻間村武路（有松町桶狭間北二丁目）のことで、距離は合っている。佐々らが桶廻間村武路で戦い討ち死にしているが、そこに「七ツ塚」がある。塚は彼らを埋めた痕跡で、この記述と合致している。義元は桶狭間の山の北に本陣を構えたとしているが、それは突然先頭で戦いが始まったので、豊明史跡の本陣は臨時の陣であって、前から予定していた本陣ではない。そこは不用心な狭間の谷であるが、急なことで、しかも勝ったと報告があり慢心したので安心して本陣としたのである。

さらに次のように記す。

「此時直に義元の陣を襲いて急に撃ちたるは則彼を擒不ため哉、是其の不意を計るの道なり」

急に本陣を襲ったのは、義元を捕えるために不意討ちする作戦であったとしている。

徳川義直は家康の息子である。桶狭間合戦に家康の家



七ツ塚（有松町桶狭間北2丁目）昔は3基あった、佐々らが埋められた跡と考えられる

臣として参戦した平岩親吉ちかよしが付家老として尾張藩にいた時期もある。平岩は『三河後風土記』の著者でもある。江戸時代初期の史料で信憑性は高いと考えられる。

清洲城を信長と共に出了た筆頭小姓の岩室長門守が、佐々らと共に討ち死にしている。岩室長門守は翌年の於久地（小口）での戦いで死んだと『信長公記』にあるので、疑問視する方もいるが、兄が桶狭間合戦で死んで、弟が長門守を継いでいたのであろう。

徳川義直に仕えた尾張藩士山澄英龍の『桶狭間合戦記』には次のようにある。

「岩室長門守は、旗本より拔懸けして佐々・千秋に相続き進み戦て是又討たれけり」

ところが、その前の善照寺砦での記述には次のようにある。「信長の旗先見へければ、佐々隼人・千秋四郎急に山間を押し出す、信長遠く是を見給ひ、使番を以て下知なくして合戦は無用と制せられ、又彼甚た小勢なれば旗本の人数を少々分け遣はし加へらる」

信長は少し人数を加えている。岩室が佐々らと合流する手はずで信長の隊からすぐ出たが、この場に立ち会った兵は佐々らを制するために出した使番と思ったのである。信長と岩室は打ち合わせていて、岩室が桶廻間村まで道案内したと考えられる。

八 真実の桶狭間合戦

進路の史料や、『成功記』からもわかるが、まとめると桶狭間合戦は次のようであった。

(注) で、補足した証拠史料を後ほど詳しく解説する。

永禄三年（一五六〇）五月十九日朝、今川義元本隊は五千の兵を引き連れて沓掛城を出発し、大高城へ向かう。隊列は二キロ以上に及び、義元は塗輿に乗って先頭から一キロ後方にいた。

織田信長は当日の朝早くに岩室長門守ほか主従六騎で清洲城を出陣。熱田神宮の南にきた午前八時に大高の鷲津砦と丸根砦から立ちのぼる煙を確認、上道を通って急ぐ。善照寺砦に待機させていた佐々隼人正ら三百の兵を先鋒として岩室長門守と共にすぐ出発させる。

(図11) 佐々らは太子ヶ根を通って釜ヶ谷で待機する。昼頃、行軍してきた今川軍先頭と桶廻間村武路①で戦った(武路とは「七ツ塚」がある現在の名古屋市緑区有松町桶狭間北二丁目)。

一キロ後方②にいた今川義元は、伝令から敵襲来の報せ

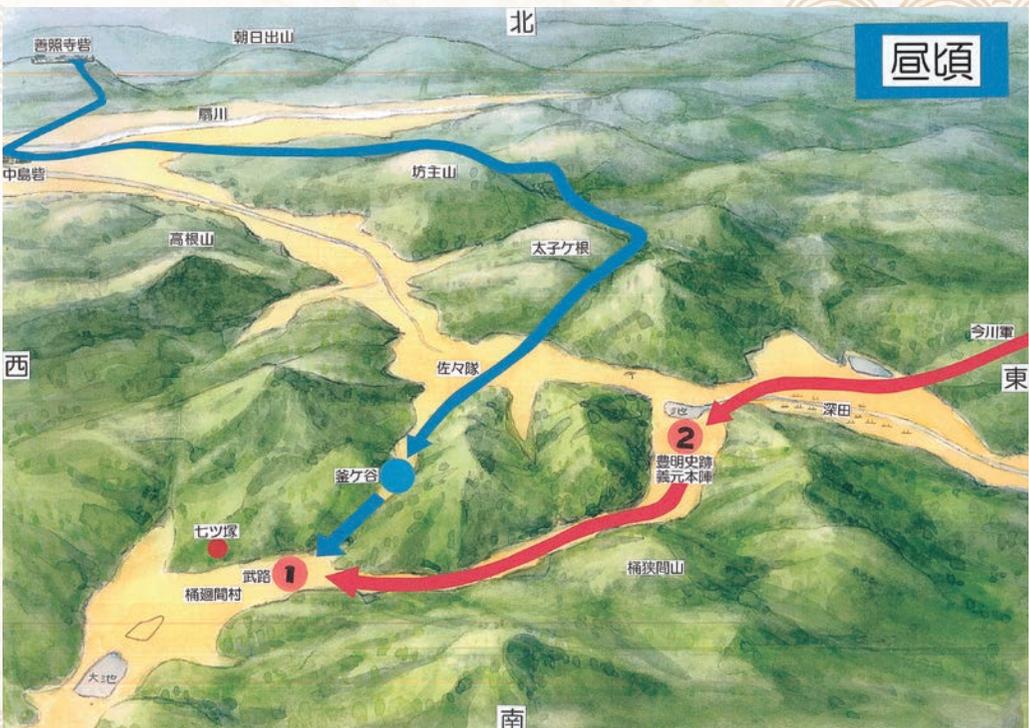


図11 昼頃、今川本隊の先頭を佐々隊が攻撃する

を聞き、即座に桶廻間村①へ主力戦闘部隊を送り出す。塗
輿を降りた田楽狭間(豊明史跡)②に臨時の本陣を構えるが、
本陣は手薄となる。

佐々らは当初優勢に戦ったが、やがて続々と送り込まれ
てくる兵に囲まれて討たれる。今川軍先頭の指揮官松井宗
信(注1)が佐々、千秋、岩室の首を持って本陣へ行く。
義元はそれを見て砦戦に続く先頭での勝利の報せに喜ぶ。

「義元が戈先には、天魔鬼神も忍べからず。心地はよしと
悦で、緩々として謡をうたはせ、陣を居られ候」と『信長
公記』にある。「義元が戈先」とは行軍を鏗に例え、その先
端が戈、つまり行軍中の今川軍先頭と戦ったと言っており、
佐々隼人正には今川軍を先頭に引き付けるおとりの役目が
あった(注2)。

しかもおとりには奇計があったのである(あとで解説)。

(図12) 信長は二千の兵で中島砦から東へ向かい、坊主山の
北の山道を最短経路で通って太子ヶ根の麓に至り、北谷を
信長本陣として待機していた。やがて義元が宴を始めた情
報が北谷へ届き、築田出羽守が「攻めるのは今」と信長に
伝えた。



図12 午後2時、信長軍が今川本陣に突入する

雨はやみ空が晴れた午後二時、信長は今川本陣への突入を命令した。織田軍先頭の隊は今川本陣の西の山を回って南から、後続隊は西の山に登り、山の上から駆け下りて同時に突入した（注3）。

油断していた今川本陣は織田軍の突入があるとは誰も思っておらず（注4）、不意打ちとなり本陣は総崩れとなった。

義元は三百の親衛隊に囲まれて東へ逃げ、五度ほど戦うが、多くの兵が深田で足を取られて討たれ五十に減った。

服部小平太が槍で義元を突くが、足を切られて倒れる。すかさず毛利新助が組みつき、左手の指を義元に食いきられながらも義元の首を取った。

今川軍は追撃されて東の戦人塚辺りまで死体が続き、二千五百人の死者を出し、今川軍は完全な敗北となった。

桶狭間合戦は信長の奇計による時間差二段攻撃で、不意打ちとなる奇襲であった。



東海道（明治末～大正初期）豊明史跡の北から東向きに撮影
右に田があるが、これが「信長公記」にある「深田」と思われる

九 証後史料

1 (注1) 松井宗信が今川軍の先頭にいた証拠

『松井家系譜』（蓬左文庫『藩士名寄』尾張藩士松井市右衛門系譜）宗信。

「永禄三年申五月十九日、今川義元尾州織田信長と对阵の節、宗信先駆つかまつり騎士二百人、雑兵七百人引き連れ相随い申し候処、知多郡屋形狭間において信長不意に之を打ち義元戦死の時、宗信以下討ち死につかまつり候」

松井宗信は「先駆」とあるので行軍中の今川軍先頭の指揮官を務めていた。したがって佐々ら三百は、今川軍先頭の松井隊九百に攻めかかったとわかる。

『総見記』では勝利の後、佐々・千秋・岩室三人の首が本陣へ届けられて義元に見せたとある。豊明史跡の西の山に松井宗信の塚（墓）があるのは、戦勝報告のために松井が首を届けて本陣に戻っていたことを示している。

義元は「屋形狭間」で討たれたとあるが、屋形狭間は豊明史跡「田楽狭間」のことで、豊明史跡で不意打ちにより討たれたとしている。

松井宗信の甥の宗親は、桶狭間合戦から帰り、永禄十二年に家康の家臣となり、その息子重親は慶長六年（一六〇二）に尾張植田（名古屋市天白区）に領地を与えられ、初代尾張藩主、徳川義直の家臣となっている。松井宗信の戦死地が特定されているのは、ここで戦った宗親が松井宗信の遠忌法要を塚の前で行っていたからであろう。

徳川義直は戦から六五年後に「桶狭間古戦場御巡覧」されたと『源敬様御代御記録』にある。『成功記』を書くための取材であったと思われる。殿様が古戦場を見たいといえ、家臣の中で詳しい者が案内役を務めたはずで、松井宗信の塚も確認したのであろうから、家臣となっていた松井重親に聞いた可能性もある。



松井宗信の墓、右は七石表二号碑（松井の塚跡）

「十町の外に出さしめ」と『成功記』にあるので、松井隊と佐々隊が戦った場所も巡覧されたのではなかるうか。

2 (注2) 佐々隼人正がおとり役を引き受けていた証拠

信長の家臣であった父、道家尾張守から聞いたとする『道家祖看記』に、佐々政次(隼人正)が信長と打ち合わせていたとある。

佐々は死を覚悟していて、そのかわり弟内蔵助(成政)と倅(清蔵)の将来を頼み、自分が今川軍の押さえをする(引き付けておく)ので、殿(信長)は脇鎧に(横から)攻めるようにと計略を述べて今川旗本へ向かって行ったとある。打ち合わせていたのであるから、抜け駆けではない。佐々隼人正は「おとり」の役目を引き受けていたのである。

弟の成政はこのあと戦功を賞されて春日井郡の内八千貫文(約八億円相当)を賜ったと『武功夜話』にある。桶狭間合戦一番の戦功で沓掛三千貫文をもらったとする築田出羽守よりはるかに大きい。倅の清蔵も一五歳で比良城主になっていて、信長は約束を守っていた。佐々隼人正政次こそ桶狭間合戦での戦功一番であった。

3 (注3) 山の上から攻撃があった証拠

『松平記』は次のように記す。

「永禄三年五月十九日昼時分大雨しきりに降。今朝の御合戦御勝にて目出度と鳴海桶はさまにて、昼弁当参候処へ、其辺の寺社方より酒肴進上仕り、御馬廻の面々御盃下され候時分、信長急に攻来り、笠寺の東の道を押出で、善照寺の城より二手になり、一手は御先衆へ押来、一手は本陣のしかも油断したる所へ押来り、鉄砲を内掛しかば、味方思ひもよらざる事なれば、悉敗軍しさはぐ処へ、山の上よりも百余人程突て下り、服部小平太と云者長身の鎧にて義元を突申候処、義元刀をぬき青貝柄の鎧を切り、小平太がひぎの口をわり付給ふ。毛利新介と云もの義元の首をとりしが、左の指を口へさし入、義元にくひきられしと聞えし」

寺社方(僧侶や神官)が酒肴を持ってきたこと、攻撃のあった「時分」の状況、鉄砲を撃ちかけられたこと、「山の上よりも百余人程突て下り」などかなり具体的であり、その場にいた人にしかわからない事が書かれていて、実際に本陣にいた兵からの報告と考えられる。その兵とは盃の順番を待っていた馬廻り衆と思われる。

『天沢寺記』^{てんたくじき}に、長沢城主の松平政忠が丸根砦の戦勝報告に今川本陣を訪れていて討たれた記録がある。政忠の家臣で、生き延びた馬廻り衆が報告したのであろう。

『水野勝成覚書』にも山の上からの攻撃を伝えている。

「義元合戦は我等が生れる四年以前の永禄三年の事だが、聞くところによれば、おけはさまにて昼弁当をあがっているところを、上の山より服部小平太突きかかり」

「上の山より」は、『松平記』の「山の上よりも百余人程突て下り」が事実であったことを裏付けている。

水野勝成は慶長五年（一六〇〇）刈谷城主になっている。戦のあと近い時期であり、地元なので実際に知っていた人から聞いた可能性は高い。

小瀬甫庵『信長記』に、「彼が陣取りし上なる山にて、旗を張らせ、各をり立^{（山を下って）}つて懸^かかれと下知^{げち}し給へば」とあるが、義元本陣の西の山に旗を立てて、後続隊は旗を目指して登り、各々山を下って突入せよ、と信長が命じていたのである。

また『松平記』に、「鉄砲を撃ちかけ」とあるのは、山に登った者も同時に突入するための相図であったと思われるので、二―三発のことと思う。

4（注4）本陣の実態を示す史料

豊明史跡に建っている『桶狭間弔古碑』^{せうこひ}（二八〇九）は、松井宗信の弟の子孫、尾張藩士松井小十郎の二男で、氷室家の婿養子になった津島の神官氷室豊長^{ひむろ}が「感ずる所あつてこれを建てる」と裏面に書いており、豊長が書いた内容で、今川本陣の状況を伝えている。

敵が攻め込む関^{せき}の声が背中の方から聞こえたが誰もすぐに襲われるとは思っていなかったと、今川本陣が不意打ちされた時の状況を碑面に刻んである。軍中に酒が出たとも記す。「信長奇兵^{きへい}を以て之^{これ}を襲う」と、はつきり奇襲としている。松井家にあつた記録と思われる。なお、碑面に「秦鼎撰^{はたかなえせん}」とあるが、豊長の文を格調ある漢文に置き換えたのが儒学者^{じゆがくしゃ}の秦鼎である。この碑文は数少ない今川本陣にいた者の記録で、貴重である。



豊明史跡にある「桶狭間弔古碑」右は大正4年の碑

十 おとりの策を信長が考えていた証後

『武功夜話』に、当時三五歳の小坂雄吉（著者の祖父）の覚書として、「三月晦日」生駒屋敷（江南市小折）で聞いた信長の言葉が記載してある。

「如何に治部少輔（義元）鉄椎の構えといえども、勝に乗ずれば油断あり。駿・遠・三の大兵長途の兵なり。この軍路を止めせしむるの策、普段野にある者よくよく勘考あつてしかるべきと仰せられ。若治部少輔くつろぎの期これあり候わば、天与の機なり。梁田弥次左衛門、同鬼九郎とよく示し合せ、共に相計りて逐一注進候え」

信長は「軍路を止めせしむるの策」を問いかけている。長くなっている今川の進軍を止める策は、野にあるその方達なら分かるであろう、よく考えて工夫せよ。

信長の考えのなかに、佐々らを差し向けて「軍路を止めせしむるの策」が二カ月前には出来上がっていたことを示す証拠である。

今川軍の先頭に攻めかかれれば行軍は止まる。そうならば

義元がどう動くのか、信長には想定できていて、まさにその予測通りに義元は行動していた。

自らの命令で兵を前方に送り出し、塗輿を下りた谷を臨時の本陣とする。手薄となった不用心な谷に本陣を置いたのである。さらに、信長が義元をくつろがせようと考えていたことは信長の言葉からわかる。したがって義元に、大高の砦戦と佐々らとの戦いにすべて勝たせて油断させた。

義元は手薄となった本陣で、砦戦に続き先頭での戦いにも二度とも勝ったと聞き、喜んですっかりくつろいでしまった。その油断した所へ織田軍が突入してきた。

その突入時の本陣の状況を『信長公記』は次のように記している。

「弓・鎗・鉄砲・のぼり・さし物、算を乱すに異ならず。今川義元の塗輿も捨て、くづれ逃れけり」

今川軍本陣に槍や鉄砲などの武器が転がっていたとある。槍を手にする時間もなかったということは、一瞬の出来事であったことを示している。塗輿も放置したまま東へ逃げているのはまさしく不意打ちであり、急に襲撃された時の状況を『信長公記』は記述していたとわかる。

なお、築田と示し合わせて注進せよと述べているので、今川本陣の情報を調べ、築田が信長に報告していたとわかる。本陣に酒肴を寺社方が持つてきたと『松平記』にあるが、『武功夜話』では今川本陣を調べるためとしていて、細作人（スパイ）が寺社方の後ろにいたという。それで義元本陣をピンポイントで襲うことができたことが理解できる。

『武功夜話』は偽書ではない

なお『武功夜話』を偽書とする説があるので反論しておきたい。

『武功夜話』とは、伊勢湾台風の後、愛知県江南市で見つかった史料で、信長から秀吉、関ヶ原戦までの詳細な前野家の記録。著者は庄屋の吉田雄翟（一五八七〜一六五八）とされ、曾祖父、祖父（織田の家臣）、祖父の弟（秀吉の家臣）、同弟（佐々成政の家臣）、父、及び各家臣たちの日記や覚書、聞き取りなどを基にまとめたとされる。膨大な量があり出版されている。ところが、現在の通説と異なる話が多く、史料として認めない学者もいる。偽書の根拠とする主な論点として次を指摘しているが、勘違いしている。

①『《富加》「笠松」「八百津」と当時なかった村名の記載があり偽書の証拠』とする。

「富加」は「富加道」と他の史料にあるから道の名で村の名ではない。

「笠松」は天正十四年の大洪水で消滅したが、復興後元の名に復帰した村。

「八百津」は「八百みなと衆」とあるから港の名で村の名ではない。明治に港の名を町の名にした。

②《桶狭間合戦では定説の「正面攻撃説」と一致せず作られた話であろう。蜂須賀小六が田楽狭間で酒肴と同時に「唐芋」を出したとあるが、「さつまいも」は江戸中期に持ち込まれたものであり偽書の証拠』とする。

「唐芋」は「とういも」と読むのが正しく里芋の事で、とういもと呼ぶ地域は愛知県に現在もある。

正面攻撃説と一致しないのはその説に疑問がある証明で、本書とは一致している。

その他、多くの証拠を提示しているが、的を突いた指摘は見られない。詳しくは拙著『桶狭間合戦奇襲の真実』で証明しているので、参考にしていただきたい。

十一

義元はなぜ油断して酒宴を開いたのか

軍中に酒を出し、酒宴を開いたので義元は討たれたと『尾張名所図会』は伝えている。図13を見れば弓・槍・鉄砲などの武器は立てかけてあるし、酒を飲むためには兜を外さなくては飲めないのです、皆かぶっていない。このとき図14のように急に襲われれば、まず兜をかぶり、紐を結ばねばならず、槍などの武器を手にする時間もなかったことが理解できる。「勝って兜の緒を締めよ」の言葉通りとなったのである。

しかし戦争が終了していないのになぜ酒宴を開くなど油断したのであるうか。

『武功夜話』の信長の言葉を聞けば、信長は義元を油断させる作戦を考えていたことがわかる。佐々は信長と打ち合わせていたから、おとりには重大な役目があつて、信長の身代わり（影武者）を務めたと考えられる。それは次の史料が示している。

小瀬甫庵『信長記』は、善照寺砦で佐々たちが「御紋の

旗を待ち請け」としている。

佐々は、信長から御紋の旗を受け取る

約束で善照寺砦に待ち受けていて、

岩室長門守が旗を持って佐々隊に加わったのであろう。

『中古日本治乱記』には「信長の大先手は佐々隼人正正道、千秋四郎大夫良文、信長の瓜紋の旗差揚て向ふ」とあり、『改正三河後風土記』にも、佐々らが「信長の窠の紋の旗真先に立て進みたる」とあるが、「瓜」も「窠」も信長の紋「五葉木瓜紋」の別称である。

佐々・千秋は桶廻間村武路で、その御紋の旗を馬上に掲げて今川軍と戦った。今川軍は信長の旗を掲げた武将を信長と思ひ込み、討ち取った首は「信長の首」と義元に報告されたので、「天魔鬼神も恐れからず」と勝ち誇っている。天魔鬼神と言われた信長もひとたまりもないと言っていて、信長を討ち取ったと確信していたのである。それで祝宴を開くことにした理由がわかる。

岩室長門守は、信長から預かった陣羽織など証拠の品を佐々あるいは千秋に着けさせたのであろう。

佐々隼人正らを信長の影武者に仕立てる奇計があつたの





図 13 『尾張名所図会』天保 12 年 (1841)「桶狭間陣中に今川義元酒宴の図」

である。信長は、自分を討つたと思わせれば義元は油断するであろうと考えたが、その奇計に義元はみごとに引っ掛かり、信長を討つたと確信して早くも祝宴を開く。謡を三番もうたい祝い酒を出すなど、信長の狙い通り、完全に油断してしまった。

『三岡記』には、「善照寺の城より二手に分け、一手は義元の先手へ向け、一手は本陣にむけらるるなり。信長の推量の如く油断しありける所へ押寄ける故、一手もたまたらず敵敗走す」とある。信長の推量による計略通りに油断したと述べているのである。

『春日山日記』に「奇計」とあるのは、この身代わりによるおとり作戦のことであろう。信長の巧妙な計略により、狙い通り義元は油断し、奇襲攻撃で大勝利となった。

これが桶狭間合戦の真実である。



図 14 田楽狭間へ織田軍突入の図

士 疑問に答える (Q&A)

Q1 今川義元は上洛しようとしていたのですか？

A 小瀬甫庵『信長記』ほか多くの史料に、義元が上洛しようとしていたとあるが、正面攻撃説は、京や途中の大名に根回しした形跡がないから上洛途上の出来事ではなく、甫庵の間違いとしている。しかし、京まで行く行列が途中で襲われたと考えるのは間違いです。義元には京に上る野望があったが、上洛は尾張を制圧してから後のことです。

甫庵『信長記』には「今川義元は天下へ切て上り国家の邪路を正んとて、数万騎を卒し」とあり、遠江と三河を程なく従えたとしているが、二国を従えるのに数十年かけている。数万とするのは二国を攻めた時の人数で、尾張へは四万五千を出したとしているから別の話です。尾張を制圧するのも簡単ではなく、年月を要する。

『改正三河後風土記』には「尾張を手に入れて、近江に発向し佐々木を責亡し、京都に旗を立て、天下を掌握せんと」とある。尾張を制圧してから、近江も攻めると計画を示している。つまり上洛はまだ先の事なのです。したがって根

回しがしてないのは当然です。

参謀本部は「京師に詣り將軍足利義輝に謁し」としているので、参謀本部が甫庵『信長記』を読み間違えていたのであって、甫庵の間違いではないのです。

Q2 今川軍の出陣数は何人ですか？

A 今川軍の出陣数は各史料により八千、一万、二万、二万五千、三万、四万、四万二千、四万五千、六万とみごとに異なっています。参謀本部は二万五千としていて、現代の説も多くが採用しているが、『信長公記』は四万五千とする。筆者が調べた限りでは江戸時代に記載のあった六〇の史料中で、四万が四〇%で最も多い。四万の半数である二万が正しいと主張する史料もある。また、大きく見積っても二万四千が限度とする武田信玄の家臣高坂弾正が述べたとする史料もある。

「四万と聞いた」とする史料は多いので四万は今川が流した噂と思う。筆者の推定は二万五千が今川方の総戦力で、半数は国の守備に残すと思われるので、出陣は一万、先行の隊を含めて一万二千位と考えています。一万とする江戸

時代の史料は、『足利季世記』『定光寺年代記』など、知る限りでは五冊あります。

今川軍は二千五百余が討たれたと史料にあるが、その内武士は五百八十余としているから二三%となる。松井家の系譜は騎士二百と雑兵七百としているので武士は二二%となり、近いので、武士二三%は正しいと思う。今川方を一万とすれば武士が二千三百、雑兵が七千七百で、一万二千とすれば武士が二千七百六十となるが、出陣した武士の数としては妥当と思う。

正面攻撃説は、「奇襲とする史料はすべて甫庵の影響を受けている」としているが、今川出陣数を甫庵と同じ四万五千とする史料は『信長公記』を含め一五%しかないので、甫庵から影響を受けた史料は多いわけではない。

Q3 今川義元はどのような作戦だったのですか？

A 義元は沓掛城から大高城に入る予定であったことは確かです。

『信長公記』に「武者舟千艘ばかり」と、大高の港においてただしい数の舟を集結していたことが書いてあります。大

高城への入城後、次の日は舟で兵士を運び、一気に清洲城に攻め込む作戦と考えられます。

『今川義元桶迫間合戦覚』宝永三年（一七〇六）に、義元が次のように述べたとある。

「明日は熱田焼払ひ清須を責はろさんと宣ひける」

早朝まだ暗いうちに先発隊が船で熱田の港に行き、町に火をかければ煙が上り、尾張全土に知れわたるので、清洲城をはじめ各城からも兵が熱田に集結してきて、清洲城の守備は手薄になる。気をそらしているうちに、本隊は五条川の西岸に上陸して清洲城を背後から攻めれば、一気に本丸をとることができる。善照寺砦などからの兵も引くことになり、たやすく各砦を取ることができ、鳴海城も簡単に解放できる。一日で決着はつくであろう、と義元自信満々の作戦だったのです。

それは豊明史跡にある『桶狭間弔古碑』に刻まれている義元の言葉によってわかる。

「曰く、明日清洲を屠りて朝食せんと」

明日の朝、朝食前に清洲城を取ってしまおう、と豪語していたのです。

Q4 今川軍本陣は桶狭間山の頂上とする説があるが？

A 正面攻撃説は、『信長公記』に「おけはざま山に人馬の息を休め」とあるから、桶狭間山の頂上に陣を構えたのであって、田楽狭間（豊明史跡）のような不用心な低地に戦国武将の義元が本陣を構えるはずはない」と指摘した。

しかし〈兵と馬とを休息させた〉のであって、これから戦争を始めるために陣を構えたとは言っていない。豊明史跡には池があり（14頁）泉がある。兵は皆新鮮な水を飲むので休息には向いているが、山の上には水がないので休息には向いていない。

「おけはざま」とはどういうところかを『信長公記』は次のように説明している。

「おけはざまと云ふ所は、はざま（狭間）、くてみ（湿地帯）、深田足入れ（足を取られる深田がある）、高み、ひきみ、茂り、節所せつしょと云ふ事限りなし」

「おけはざま」という所は、狭間の谷で、湿地帯と説明しており、豊明史跡の地形と一致している。《山の上に本陣を構えた》と解釈するのは『信長公記』の誤読であろう。

Q5 桶狭間山はどこですか？

A 『信長公記』の「おけはざま山」には二つの別の考えがあります。

① 『感興漫筆』で、豊明古戦場を訪れた細野要斎は「桶狭間山の古戦場」と書いています。豊明史跡を「桶狭間山」としている。豊明史跡は標高30mで、鷲津砦と同じ高さがある。『桶狭間弔古碑』は「高原」、『東海道名所図会』は「原山」、『尾張名所図会』では「平山」と表現している。「高原・原山・平山」は「丘」のことで、「おけはざまの丘で休息した」と読むのが正しいと思う。『信長公記』の「おけはざま山」は豊明史跡のこと。

② 徳川義直の『成功記』は「桶狭おけはざま之山の北に陣す」として『信長公記』の「おけはざま山」とは別と考える。

豊明史跡に建っている『桶狭間弔古碑』は「陣桶狭山北」とあるが、『成功記』と同じで「桶狭間の山の北に陣す」と読むのが正しい。南にある山を桶狭間の山としているが、「桶狭間図」（17頁図9）には屋形狭間（豊明史跡）の南の山を「桶狭間山」としており、『成功記』や『桶狭間弔古碑』と同じで、「桶狭間の山」と尾張藩は認識していたとわかる。

この山は『桶狭間古戦場之図』（14頁図6・7）では、南の山を「石塚山^{いしづか}」としている。義直は石塚山を「桶狭間の山」と書いたと思われる。

豊明史跡の南から撮影した昭和三四年の写真を見ると、石塚山にはホシザキ工場が建って平らにならされているが、昭和三〇年の写真でははっきり山と認識できるので「桶狭間の山」としたのであろうが、山名が「桶狭間山」ではないと思う。



豊明史跡から南（昭和34年撮影）前方の山は石塚山で、工場が建っている。右の森から織田軍が突入してきた。距離は150m



昭和30年撮影の石塚山「桶狭間山」と（17頁図9）にある山

Q6 名古屋市緑区有松町桶狭間の七ツ塚は何か？

A 有松桶狭間古戦場公園の北二〇〇m（桶狭間北二丁目）に、七ツ塚と呼ばれる塚があります。三個の塚が昭和まで残っていたが、平成元年に宅地造成で壊され、一つだけ残されています（現在の桶狭間北二丁目は昔桶狭間^{あざたけし}字武路）。（写真は19頁）（図は34頁）

明治九年の『桶廻間村地引帳』には官有地として、字武路二十八番、四十五番、六十五番に塚の記載があり、五歩（坪）または四歩となっているから、現在の塚跡とほぼ同面積の塚が三個あったことは確かです。

昭和十年桶狭間字武路の『御料林実測図』では、現在の塚（五坪）の南東九〇m、さらに南東六三mにも五坪程の土地があり、一列に三個並んでいたことが確認できる。これは桶狭間合戦の痕跡で、今川軍の先頭と戦って討たれた佐々隊を埋めた塚と思われる。

桶狭間村ではこの塚が桶狭間合戦の時の戦死者の塚と伝えられていたので、ここで義元が討たれたとイメージされ、誤解が始まったのではないかと思います。

現在二か所ある古戦場跡は両方とも戦場だったのです。



図 15 緑区有松町桶狭間
(国土地理院発行地形図 2005 に追記)

Q7 なぜ桶狭間合戦とこののですか？

A 豊明史跡は、当時大脇村で桶廻間村ではなかった。それで、「桶狭間の戦い」と言うのだから桶廻間村の合戦であって、豊明史跡は間違いであろうと主張する方が昭和になつてから現れ、誤解を広めている。

しかし今まで述べてきたように、佐々らとの最初の戦いが桶廻間村で行われたので、「桶狭間合戦」の名が付き、主戦場となる田楽狭間（豊明史跡）が文献史料に「桶狭間古

戦場」と記載されたので、東海道を通る旅人から「桶狭間」の地と呼ばれて紹介され、大脇村なのに桶狭間と呼ばれるようになったのです。江戸時代の史料はすべて豊明史跡を「桶狭間古戦場」としています。しかし地元の人には桶狭間古戦場を「屋形狭間」としている。

さまざまな呼び名があつて混乱しているが、現在のよう
に正確な地図のない時代なので、遠方の人には土地名の違
いや地境は分かつていないのです。

長篠合戦では、緒戦の「長篠の戦い」と、主戦場となつた「設楽ヶ原の戦い」とを別々に表記して、二度の戦いを区別されるようになったが、それは近代になつてからのことで、ほとんどの文献史料は「長篠の戦い」として設楽ヶ原での戦いを記述しています。桶狭間合戦も同様で、豊明史跡での戦いを「桶狭間の戦い」と記述しているのです。

Q8 豊明史跡に塚があつたというが？

A 寛永五年（一六二八）に東海道を通つた俳人の齊藤徳元とくげんが『関東下向道記げこうみちのき』で豊明史跡の塚のことを書いています。

「道より馬手にあたりて小高き古塚有。（中略）義基よしかた

かひまけて此所にて果給ひし古墳なりと聞て」

戦いの六八年後に義元戦死の場所と伝える大きな塚があったことがわかります。東海道の南にあったとしているから豊明史跡のことで、明治九年にこの塚の上に義元の墓碑が建てられました。

その塚は『桶狭間古戦場之図』（14頁図6・7）に描かれています。「此所義元戦死の地、即つか跡と云」とあり、斎藤徳元が見た塚とわかります。七基の塚が描かれているが、明和八年（一七七二）に尾張藩士が「七石表」とする七基の石碑を建てています。（図7）は七石表の碑を建てる六六年前に塚があつたことを示している。松井八郎塚が山の上にあるが、これは松井宗信の塚で、碑が建つ前から松井の塚と特定されていたことがわかります。現在では七石表の辺りに土をもった塚はなくなっているが、古くは山の形をした塚が七基あつたことが図から確認できます。

Q9 豊明史跡を戦場とする証拠はありますか？

A 豊明史跡の北に隣接して、昭和三十三年に建てられた病院があります。医者で後に総長となる藤田啓介氏（一九

二五〇九五）が『藤田学園保健衛生大学創設記』で、次の文を掲載されています。（現在藤田医科大学）

「学園本部大時計の下付近は沼や沢や池で、基礎工事の際、地表を約六〇メートル掘削し、固い地面に杭を打ち込んだ。そのときの土工の後日談では、刀剣や武器等がいくつも出たが、錆びてしまつて触れると、すぐぼろぼろになつたとのことであつた」

『桶狭間古戦場之図』（14頁図6・7）を見ると、東海道の南に池が描いてあり、病院の場所はその池の上に建てたことがわかります。池に沈んでいた武器が出土していたのです。今川の兵は池に沿って東へ逃げるが、追い打ちをかけられ、押されて多くの者が池や深田にはまり、次々と討たれていた状況が証明されます。

したがって豊明史跡が戦場であつたことに疑いの余地はありません。



豊明史跡北の病院、建設時地下から武器が出土していた

Q10 出土した武具などは残っているのですか？

A 病院の下から出土した物は残っていませんが、古い武具が豊明史跡の西にある高德院に展示されていました。高德院は明治二十七年に高野山から本尊と寺号を移して創建された寺ですが、明治から小さな史料館がありました。写真のようにおびただしい数の武具が展示しており、錆びていて保存状態の悪い古い武具ばかりで、槍で射抜かれた鎧も展示されていました。筆者は中学生の頃この展示を見えます。ご住職は地元大脇村や落合村の方たちが寺に持ち込んだものと説明されました。

ただし現在は史料館を閉鎖し、武具もほとんど処分されたとのことですが、少し現存しています。これらは討たれた兵士から村人が拾い集めたものと思われれます。あるいは、曹源寺の和尚が戦人塚へ村人に死体を集めさせたと伝わっているが、埋める際には鎧を外すので労働の報酬として村人が持ち帰ったものかもしれません。刀や槍は売れたでしょうが、売れなかった物が大量に残っていて明治



高德院史料館、明治からあったが現在閉館で処分された（一部現存）



高德院に現存する武具の一部



高德院にあった、槍に射抜かれた鎧（平凡社『太陽』1978・2より）

になって不要になり、子孫が高徳院へ持ち込んだと思われるます。

昭和二二年頃に豊明史跡の近くで井戸を掘ったときや、畑から鎧や刀が出たと話された方が現在います。その方は合計四分分の鎧を掘り出していて、出るたびに高德院へ持って行ったということです。

Q11 義元はどこで討たれたのですか？

A 多くの史料が本陣で討たれたとしていますが、『信長公記』では三百の兵に囲まれて東へ逃げ、五度ほど戦ったところで五十に減り、義元は討たれた。また、多くの兵が深田で足を取られ、はいざり回る所を討たれたとあります。

したがって本陣内で討たれたのではないと思われま

す。『尾陽雜記』には、「義元の陣崩れけるを、東に向て山を越て追うちにす」とあるので、豊明史跡の東の低い山を越えています。山を下りたところに皆瀬川の細い流れが現在もあるのです、その辺りが深田となっていたのです。追い打ちされ、義元もそこで討たれたと考えられます。明治末頃の写真(22頁)ではその辺りは水田となっています。

天保十二年の『大脇村絵図』(図16)をみると、古戦場から東に細長く田となっていて、義元が討たれたのもその水田の辺りと思われま

す。『桶狭間合戦縁記』(図17)の古戦場図の中央、東海道の脇に碑が描いてあります。現在はありませんが、昭和四五年頃に筆者はその碑を見ています。「今川治部大輔義元墓」とあったと記憶しています。工場の敷地内に

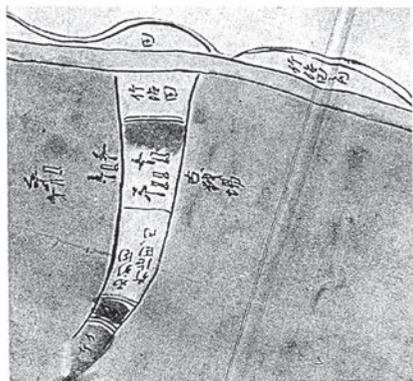


図16 『大脇村絵図』天保12年(1841) (『豊明市史』) 上が北

あつて道から一五mほど南の位置でしたが、その碑の場所が戦死地ではないかと思ひます。豊明史跡から三〇〇mほど東になります。(詳細は『桶狭間合戦奇襲の真実』をご参照ください)



図17 『桶狭間合戦縁記』嘉永元年(1848) 古戦場図 上が西

Q12 今川軍の主な戦死者には誰がいますか？

A 『天沢寺記』には「桶狭間殉死之士」として四五名の武将の名を記してあります。討たれたのは義元の他、叔父・甥・妹婿など、今川一族の者も多い。

戦国時代でも、野戦で大将首をとられることはほとんど

ありません。家臣は命を張って殿様を守るからです。義元が討たれた事でも驚きですが、この戦いで城主の戦死者が多いことは異常で、次の六名が戦死しています。

遠江二俣城主 松井宗信 遠江引馬城主 飯尾乗連

遠江井伊谷城主 井伊直盛 三河長沢城主 松平政忠

駿河蒲原城主 蒲原氏徳 駿河川入城主 由比正信

義元は祝宴を開いていたから、当然祝いの席に多くの城主や親族など重臣が本陣に招かれていて、まさにその宴の最中に織田軍が突入してきたから、多くの城主が討たれていたと理解できます。奇襲攻撃以外には考えられないことです。

Q13 戦人塚に戦死者が埋められたというが本当ですか？

A 豊明史跡から東南東一・三キロに、昭和十二年に国から同時に史跡指定された「戦人塚」があり、ここに多くの死体が埋葬されたと伝えられています（豊明市前後町仙人塚）。

『蓬州旧勝録』には「千人塚」として紹介しており、大脇村曹源寺の快翁龍喜和尚が地元の旦那衆にたのみ、馬を出させて死骸を集め、塚を築いて法会をしたとあります。

「戦人塚」の碑は元文四年（一七三九）、百八十回忌の供養

祭に建てられたとされる。

『桶狭間合戦名残』には「今川義元二百年忌之節、大脇村宗源寺此所にて千人供養致候由」とあり「千人塚始、戦死人塚と申由」「千人塚辺迄追討いたし候処と申伝候」とある。

大脇村の曹源寺は豊明史跡の東南二キロ、戦人塚の南一・二キロに現在あり、今川義元と松井宗信の位牌があります。位牌があるのは遠忌供養祭に両家から代表が来ていたと考えられる。松井の位牌には裏面に、納めた尾張藩士松井武兵衛重武の名があります。戦人塚の近くを宅地開発した時に、当時の人骨が多数発見されているから、戦死者を埋めた場所であったことは確か。東に攻めたとする『信長公記』とも一致する。

Q14 錯掛けの松は何だったのですか？

A 「鎧掛けの松」と呼ばれた松の巨木が、名古屋鉄道中京競馬場前駅の南にありました。この松は大正元年の大風で



戦人塚、多くの兵が埋められたと伝わる

被害を受け、同十二年に虫害で枯死して今はありません。現在「よろいかけの松の旧地」碑が建ててあります。

『桶狭間合戦縁記』の古戦場図（37頁図17）の右端に「信長公鎧掛松名木也」と書いてあるから、信長が鎧をかけた松として古くから有名だったので。ただし二代目の松と『豊明町史』にある。

この松を描いたとする襖絵が、堺市の大安寺に現存しています。寺伝では狩野永徳作とあり、永徳が鳴海に来た時に以前描いた松に枝を描き忘れていたことに気付いてすぐ引き返し、枝を描き足したと伝え、実際に書き足した跡があるということです。永徳は桶狭間合戦当時十八歳で、後に信長の注文で安土城の襖絵を描いています。本来安土城へ納めるために描いたが、手直したので、描き直して納入するが、安土城は炎上してしまい、手直した方は残ったと考えられます。

この松に言い伝えがあるのは、戦の後の集合場所であった



鎧掛の松、大正12年に枯死、図17に「信長公鎧掛松名木也」とある

ことを示しています。信長は義元の首を取ったことが確認できれば、後は戦がすむのを待てばよいので、ここに戻り、暑い日であったし、雨で濡れていたから鎧を脱いで休んでいたのです。『信長公記』に、元来た道を通って帰ったとあるから、太子ヶ根への道に近かったと考えられます。一本松で見通しがよく、集合場所としてよい場所だったのでしょう。



鎧掛の松、堺市大安寺に現存する襖絵、狩野永徳作と寺伝ある



Q15 小瀬甫庵「信長記」とはどのような史料ですか？

A 多くの研究者が甫庵「信長記」は正しくないと指摘しているが、それは多くの誤解からそのように言われるようになったのです。『三河物語』で、大久保彦左衛門が「信長記ヲ見ルニ、イツハリ多シ」と書いていて、この言葉が評価を低めているのですが、それは長篠合戦などでの人物評価が正しくないと書いています。徳川に忠義を尽くし

た侍は織田から見れば特に評価はないが、織田が評価した侍は徳川の裏切り者と思っただけかもしれません。どちらの陣営から見たかで人物評価は異なっており、偽りとは言えないと思う。

小瀬甫庵は桶狭間合戦の四年後に尾張小幡村（名古屋守山区）で生まれているので、戦の後近い時期に世間で語られていたことを聞いています。発行したのは戦から五年後で、太田牛一の書を基本とするが補足したと書いているから、基本的には『信長公記』を参考にして書いているが、当時あつた記録や、他の説も取り入れているのです。

「遊花」として、風雅を事とする人の候ひけるが」と書いてるように、「遊花」なる人物の説も引用している。熱田神宮に参拝したことから神戦となつたとし、「神霊新なる事肝に銘ずる者なり」とあり、勝利は熱田大明神のおかげとされている。それで白鷺が戦場に導いたとか、熱田神宮での祈願文などを載せているが、神戦は遊花の書にあつたことと思われる。『信長公記』にも「熱田大明神の神戦かと申し候なり」とあるので、そのように語る書が当時あつたのは間違いないでしょう。迷信が信じられた時代なので、神の

御加護がなければ二〇倍の敵に勝てるはずはないと考えた人もいて、甫庵も影響されたのです。

祈願文には今川軍を「四万」とあるが、本文では「四万五千」としているから祈願文は甫庵が書いた文ではない。かなりの名文であるから甫庵を超える教養人の作で、それを引用したと思われる。この祈願文は実際に使われたものではないと考えられるので、嘘であろうとする説には賛同者が多く、甫庵の創作と断定されたのです。それですべての記述は創作によるものとみなされ、誤解されている。

前に解説したように、上洛や迂回進路は、参謀本部が『信長記』を読み間違えていたのであつて甫庵の間違いではないのです。奇襲についても『嚴助大僧正記』『春日山日記』など直後に書かれた日記にあるので、甫庵の創作ではないとわかります。

小瀬甫庵は自分の意見を加えて詳しく書いているが、意見は教訓調で不要、詳しい分間違つた推定と思われる所もあり、注意して読む必要があるが、甫庵が書いたから間違いとするのは言い過ぎで、再評価が必要と思います。

十三 参考写真

1. 今川の城



鳴海城

名鉄鳴海駅の北 200 m
「鳴海城跡公園」
今川の武将岡部元信が
守っていて最後まで抵抗。
義元の首と交換で開城した

大高城

JR 大高駅の西南 500 m、
左二の丸跡、右が本丸跡。
松平元康（家康）が前日
兵糧を入れ、早朝丸根砦
を落とした
家康は二の丸に入っていて、
本丸は義元のために
空けていた。

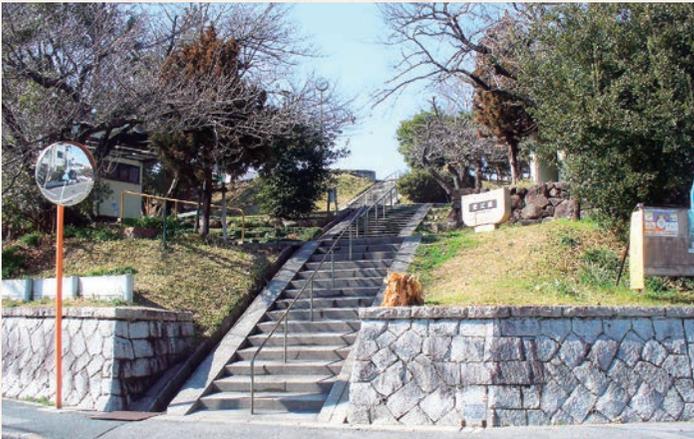


沓掛城 1

南北朝の後から
代々近藤氏の城であった
「沓掛城址公園」

沓掛城2

聖応寺の裏山(本丸跡)から西の眺め。『寛政重修諸家譜』によれば、近藤景春は高圍城に移っていたので、その城跡かも。標高 46 m

**2. 織田の砦****善照寺砦**

鳴海城の東 450m、佐久間信盛が守っていた。佐々・千秋隊が待機していて、信長到着と同時に出陣した。

中島砦

名鉄鳴海駅の西南 500m、左が扇川、右が手越川、その間にあった。信長はこの砦から扇川沿いに東へ向かったという





鷺津砦

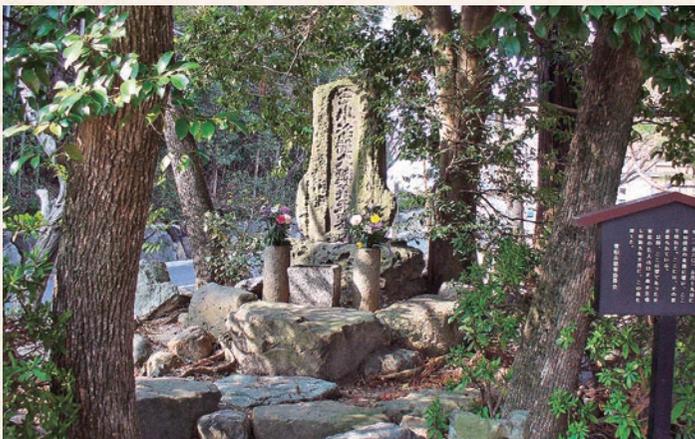
大高城からの眺め、大高城から北東700m、山上建物の右辺り、標高30m、JR大高駅の東200m。写真の右枠外に丸根砦がある。

丸根砦

右の山が丸根砦、左の山が大高城、距離は750m。佐久間大学が守っていたが、松平元康（家康）に攻め落とされた。標高35m



3. 豊明史跡



義元塚

義元の墓と伝えられた大きな塚、明治9年に墓碑が建てられた「今川治部大輔義元墓」



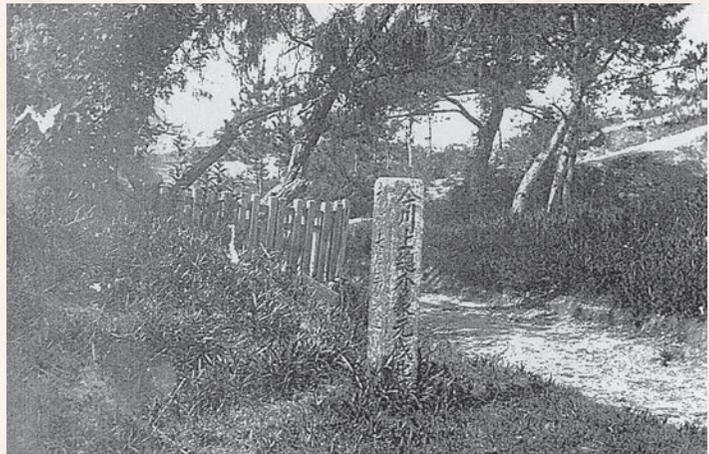
義元仏式の墓

戒名が書いてあり 300 回忌法要の後万延元年 (1860) に建てられた。「天澤寺殿四品前礼部侍郎秀峯哲公大居士」
「願主某」

七石表 1 号碑

明治末頃撮影

明和八年 (1771) に尾張藩士が建てた「今川上総介義元戦死所」とある。上総介は義元の旧官名



高德院

「今川義元公本陣跡」の碑は、今川義元公直系十九代の芹澤二郎氏が、昭和 50 年代に豊明史跡内に建てようとしたが文部省から許可されず、高德院に建てた物

おわりに

桶狭間合戦は信長の奇計による奇襲攻撃だったと提唱いたします。

奇跡と思われた大勝利は、実は奇跡ではなく、周到に計画された作戦があつて、勝つべくして勝つた奇襲戦だったので。しかも誰も考えつかない巧妙な計略があつたが、知られてしまえば対応され惨敗となるので、秘密保持のため信長は家老にも話さず、ごくわずかな家臣にしか作戦を知らせていない。戦に参加した太田牛一もその作戦を知らず『信長公記』に書いていないのです。

まるで作り話かと思われるほどの巧妙な作戦があつたからこそ、大軍の敵に勝つことができたのです。

その後、戦乱の世を一气に天下取りに上り詰める信長の行動と実績を見れば、並はずれた人物であつたことがわかります。誰にも思いつかないことを考えていて、常人とは考えることが違うのです。まさに「事實は小説より奇なり」の言葉通りの戦であり、また一生であつた。

この説は平成二四年一月一日に「桶狭間合戦奇襲の真実」として新人物往来社から出版した拙著を元として構成してあります。新たに発見した史料も加えて、できるかぎりわかりやすくしたつもりですが、紙面の都合上十分伝えきれていない部分もあり、できれば元にした拙著の方もご確認いただきたいと思っています。ただし出版社が消滅して現在絶版となっております。

この度、ジーピーセンター様のご厚意で本書が出版されることになり、感謝しています。

筆者が桶狭間合戦の研究を始めたのは六〇年前の昭和三十一年からです。豊明史跡へ行つたことがきっかけでした。中学生のときに、詳しい先生から講義を受け、参謀本部の説と『松平記』を教えていただいたのですが、この戦には謎が多く本当かどうか何も確定していないと述べられたので、それなら自分が解決すると子供心に研究を決意しました。何度も豊明の古戦場へ

行き、くまなく調べました。当時は家もなく周辺の地形なども頭に入っており、その時調査した体験が今生きていると実感しています。

その後も自分なりに研究は続けてきました。平成に入って世の中の説が変化してゆき、筆者としては受け入れ難い説が通説となつて行くのを何とかしたいと考えていました。

定年退職を機に、本格的に研究に取り組みました。文献史料を読みあさり、関連する場所を歩き回りました。驚いたことにそれまでに考えてきた筋書きを証明する史料がどんどん見つかるのです。考えが同じで地理も知っているので、難解とされる史料の意味がすぐに理解できました。筆者の説を頭に入れてから各史料を読むと、その史料が伝えようとする内容がよく理解できると思います。

正面攻撃説を信じてから史料を読むと、どの史料も一致しないことに気付きます。甫庵『信長記』や『武功夜話』などはその説にとつて不都合なことが書いてあります。したがって『信長公記』以外の史料を参考にはいけないと主張される方がいるのです。古い文献史料はどれも貴重で、先入観念にとらわれずに読むべきではないでしょうか。

筆者と同じ考えの方が増えることを期待しています。

太田 輝夫

参考文献

- 『豊明市史』資料編補二桶狭間の戦い（『信長公記』『信長記』）
『松平記』『総見記』『塩尻』『桶狭間合戦名残』『天沢寺記』
『張州府志』『蓬州旧勝録』『尾陽雜記』『桶狭間合戦縁記』
『東照軍鑑』『関東下向道記』『桶狭間弔古碑』『足利季世記』
『定光寺年代記』『大脇村絵図』『今川義元桶迫間合戦覚』
『日本戦史桶狭間役』他
『続群書類従』（『嚴助大僧正記』）続群書類従完成会
『道家祖看記』神郡周校注 現代思潮社
『朝野舊聞哀藁』（『三岡記』『桶狭間合戦記』）汲古書院
『春日山日記』三十巻本 史籍集覧
『中古日本治乱記』山中長俊著 蓬左文庫
『桶狭間合戦申伝写』蓬左文庫
『藩士名寄』（『松井家系譜』）蓬左文庫
『成功記』徳川義直著 蓬左文庫
『源敬様御代御記録』徳川黎明会
『改正三河後風土記』原書平岩親吉著 成島司直改 史跡集覧
『桶狭間図』蓬左文庫
『桶狭間古戦場之図』国立公文書館（『塩尻』三十五巻本十七巻）

『桶狭間古戦場之図』西尾市岩瀬文庫

『桶狭間古戦場図』国立国会図書館

『尾張名所図会』愛知県郷土史料刊行会

『武功夜話』『武功夜話拾遺』吉田蒼生雄訳 新人物往来社

『藤田学園保健衛生大学創設記』藤田啓介著 アセンブリ書店

『日本歴史大辞典』小学館

『歴史研究』五九二号「杳掛城の新発見」歴研 太田輝夫著

『桶狭間合戦奇襲の真実』新人物往来社 太田輝夫著

『郷土文化』六九巻第二号「桶狭間合戦の実態」太田輝夫著

『郷土文化』七〇巻第一号「真実の桶狭間合戦」太田輝夫著

明治末期の写真は、所有者のアルバムから複写させても
らったものを使用しています。

明治末期から大正初期にかけて鳴海町相原にあった写真
館「山水軒」の村井安太郎氏（号素山）が撮影した写真。
断わりのない写真は筆者撮影。

著者紹介

2020年3月1日現在

太田 輝夫（おおた てるお）

1943年愛知県生まれ 大府市在住
金沢美術工芸大学卒業 工業デザイナー
名古屋の会社に勤務 2005年定年退職
全国歴史研究会 本部正会員
佐々成政研究会会員（世話人）
桶狭間合戦研究会 代表
とよあけ桶狭間ガイドボランティア理事
ふるさとガイドおおぶ顧問
2018年10月27日 歴史大賞功労賞受賞



著書
桶狭間合戦 奇襲の真実
(2012年)

- 『桶狭間合戦 奇襲の真実』 新人物往来社 2012.11
『奇計 桶狭間合戦の真実』 ジーピーセンター 2016・6
『歴史読本』 59巻4号「桶狭間合戦は奇襲であった」 2014.4
『歴史研究』 592号「沓掛城の新発見」 2011.6
『歴史研究』 615号「桶狭間合戦 地名の真相」 2013.10
『歴史研究』 616号「天誅組総裁松本奎道と刈谷藩」 2013.11
『歴史研究』 627号「頼朝の命を狙った平家の武者景清と、その背後」 2014.12
『歴史研究』 632号「信長家督相続は十六歳」 2015.6
『歴史研究』 652号「徳川家康は源氏の末裔」 2017・6
『歴史研究』 655号「井伊直盛の戦死地」 2017・10
『歴史研究』 662号「『日本書紀』 年暦の特定」 2018・6
『歴史研究』 670号「津田左右吉説の検証」 2019・4
『歴史研究』 673号「桶狭間山はどこか」 2019・7
『郷土文化』 69巻1号「松平元康と石ヶ瀬合戦」 2014.8
『郷土文化』 69巻2号「桶狭間合戦の実態」 2015.2
『郷土文化』 70巻1号「真実の桶狭間合戦」 2015.8
『郷土文化』 70巻2号「佐久間信盛追放の真相」 2016.2
『郷土文化』 71巻1号「桶狭間合戦『信長公記』の新解釈」 2016・8
『郷土文化』 71巻2号「徳川家康の出自は源氏」 2017・2
『郷土文化』 72巻2号「今川から見た桶狭間合戦」 2018・2
『郷土文化』 73巻2号「織田信秀の没年」 2019・2・15
『成政ファン』 84号「成政あるは兄隼人正の功績による」 2012.12
『成政ファン』 85号「佐々成政の没年について」 2013.4
『成政ファン』 86号「『武功夜話』と佐々家」 2013.9
『成政ファン』 87号「佐々成政のさらさら越えを検証する」 2014.1
『成政ファン』 88号「佐々成政はどのような人か、歌から読み取る」 2014.11
『成政ファン』 89号「佐々成政切腹の真相」 2015.4
『成政ファン』 90号「佐々隼人正の桶狭間合戦」 2015.10
『成政ファン』 91号「浅野清先生との出会い」 2016・4
『成政ファン』 93号「佐々成政『武者の覚え』」 2017・4
『成政ファン』 95号「佐々政次の功績」 2018・4
『在野史論』 第15集「桶狭間合戦は奇襲」 2016・9 歴研

奇計

桶狭間合戦の真実

発行日 2016年6月4日 初版
2020年4月1日 第2版 第1刷
著者 太田 輝夫
発行印刷 株式会社ジーピーセンター
〒470-1161 愛知県豊明市栄町三ツ池下 33-3
TEL (0562) 97-1221



定価 本体500円(税込)